

# 彩の歳時記

平成二十六年 一月

新しき年のはじめにかくしこそ  
千歳をかねて楽しきをつめ

読み人 知らず  
古今集



「新しい年のはじめにあたって、このように、千歳を目指し、楽しきことをし尽くそう」  
現代人が感知することができなくなったゆつたりした「時間の流れ」を感じさせてくれる歌です。正月が本来持っている静かゆつたりした時空間。そんな感覚を思い起こし、普段では味わえない時の流れの中に身を置き過ごすのも。



## 一月の異称

睦月 正月 一家がなごやかに睦みあつて送る月。「生む月」の説もある。

## 一月の暦

一日 元旦(がんだん) 「新しい希望と決意とを持って新しい年の始めを祝う日」とする国民の祝日  
四方拝(しほうはい) 一年間の豊作と無病息災を祈り、宮中で行われる一年最初の儀式。  
太陽暦施行の日 明治五年十二月三日が明治六年一月一日となる。

二日

初夢 この日の夜見る夢。宝船の絵に「なかきよのとのおねふりのみなめさめなみのりふねのおと



のよきかな (長き夜の遠の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな) という回文(上下逆さに

書き初め

## 新年一般参賀

五日に武道館で全日本書初め大会が約四千人を集めて催される、新年の風物詩の一つ。  
午前九時半〜午後二時十分の間に五回お出ましになられる。



第九十回 大学駅伝競走 東京・大手町から箱根・芦ノ湖までの  
往路・復路それぞれ五区間の合計十区間・217.9kmで争われる。

四日 官庁御用始め

五日 小寒【二十四節気】冬至から十五日目。寒の入り。節分(立春の前日)までが寒の内。

七日 七草(ななくさ) 前夜に「七草なすな唐土の鳥が渡らぬ先に合わせてトントントン・



と歌いながら包丁で叩き、当日の朝に粥(かゆ)に入れ、一年の邪気を払う。  
八日 正月事納め 正月の行事・飾りなどを終える。  
左義長(さぎちよう) 正月に飾った正月飾りや書き初め等を燃やす。十日や十五日に行う地方も多い。

十一日 鏡開き 元は武家の行事で、具足(鎧や兜)に供えた餅を雑煮などにした際、餅は



刃物で切ると切腹のようだと手や木槌(きづち)で開くように割ったことに由来。

十三日 成人の日(第二月曜日) 大人になったことを自覚し自ら生き抜こうとする青年を祝い上げます。  
十五日 小正月 元日の大正月に対してこう呼ぶ。本来この日までが「松の内」だが、近年は七草まで。

二十日 大寒【二十四節気】 厳寒の中にも春の兆しが。

二十二日 黙阿弥忌 幕末から明治初頭に活躍した歌舞伎狂言作者・河竹黙阿弥【1816年



〜明治26年(1893年)の忌日。「月も朧に白魚の、篝も霞む春の空……」  
「こいつあ春から縁起がいいわえ」など「黙阿弥調」とも呼ばれる類語や掛詞を駆使した七五調の  
華美な科白で、現在にいたるまで観客を魅了し続けている。

## 一月の歌

君が代 元は平安時代の和歌。明治二年(1869年)イギリス公使館軍学隊長

ジョン・ウィリアム・フェントンが、国歌及び儀礼音楽の必要性を説きそれを受け  
た当時の薩摩藩歩兵隊長・大山弥助(後の大山巖陸軍元帥)が自身の愛唱歌である  
薩摩琵琶の「蓬萊山」より歌詞を採用、曲はフェントンがつけた。  
1880年に日本に馴染むメロディに改められた。「君が代は、千年も八千年も、細石が  
大きな岩になり、さらに苔が生えるまで、長く長くずっと続きますように」

君が代は  
千代に八千代に  
さざれ石の  
いわおとなりて  
苔のむすまで